

外国にルーツをもつ幼児と保護者への支援について —幼稚園における就学につながる実践的支援内容の検討—

児童生徒発達支援コース 幼児教育実践系
田中寛美

I 主題設定の理由と研究目的

平成2年の出入国管理及び難民認定法（いわゆる「入管法」）改正施行以後、A県B市には外国人登録者が急増してきた。リーマンショックによる不況から減少傾向にあったが、平成28年から増加傾向にある。それに伴い、B市立幼小中学校園に在籍する外国人幼児児童生徒の数も増加している¹⁾。

外国人児童生徒は、日本の学校で適応・言語・学力・アイデンティティの問題に直面する²⁾ことがあるため、外国にルーツをもつ幼児（両親もしくは親のどちらかが外国出身者である幼児、以下は「外国人幼児」と記載）にとって、就学に向けて日本の幼稚園を含む就学前施設での経験が必要であると考え。また、就学前施設では、保護者への理解や連携が子どもの園での安心感や成長につながる。しかし、外国人幼児の保護者（以下は「外国人保護者」と記載）においては、各国の就学前教育制度や母文化との違い、言葉の面等から就学前施設や教師との連携に戸惑いを感じている方は少なくない³⁾と考える。

幼稚園教育要領は、「海外から帰国した幼児や生活に必要な日本語の習得に困難のある幼児の園生活への適応」として、幼児の実態に応じた計画的な指導について述べている。また、文部科学省の指針でも、学齢期に近い外国人幼児への円滑な就学に向けての取り組みや就園機会の確保の推進について述べている⁴⁾。

このような現状の中、教師は外国人幼児と保護者へのよりよい支援を導き出すために、実態や意識を把握し、理解を深める必要がある。本研究では以上の考えを基に、幼稚園における外国人幼児と保護者への就学につながる支援策を探ることを目的とする（図1）。

II 小中学校における支援の実態

1. 外国人児童生徒の現状

B市立小中学校に在籍する外国籍児童生徒の数は、小学校1,294人、中学校556人、計1,850人で、全児童生徒に対する比率は3.0%と、過去最高を更新した（令和2年5月調査）。国籍別内訳では、南米系が58.0%、東南アジア系が36.7%で、国籍は28か国に渡り多国籍化が続き、使用言語は21言語である⁵⁾。

日本語指導が必要である外国籍児童生徒は1,206人、日本国籍の児童生徒では202人いる。

家族連れで永住を希望する外国人の増加により、日本生まれ日本育ちの外国人が増加傾向であり、令和2年4月に小学校1年生に入学した外国籍児童267人中188人(70.4%)が日本生まれ日本育ちである。

2. 小中学校における支援体制

B市立小中学校は「自立した学習ができる子ども」への成長を目指し、日本語習得状況に応じて段階を踏んだ日本語・学習支援、支援者の派遣、特別の教育課程の編成が行われている。基本的に3年目までで、在籍学級で学習できるよう支援体制が構築されている⁶⁾。

就学前の幼児と保護者に対しても、円滑な就学を支援するために就学ガイダンスが行われている。日本の小学校への就学義務はないため、申し立てが必要である。日本の就学前教育を受けていない、就園期間が半年に満たない幼児と保護者など対象のプレスクールを実施（1～3月、計8回）し、初期適応指導、親にも学校で使う日本語指導が行われている⁷⁾。

課題としては、外国人児童生徒の増加と多国籍化に対応するための支援の充実や人材育成・確保、スキルアップ、教師のグローバル化などが挙げられる⁸⁾。

3. 就学前施設に通園した子と通園しなかった子の就学後の違い

B市立小学校教諭への外国人児童における就学前の状況の違いによる就学後の実態に関する質問紙調査や半構造化インタビューより、日本の就学前施設に通っていた外国人児童は、日本語での日常会話力や集団生活の仕方が身に付き、安心できる仲間関係も構築されている場合もあることが分かった。反対に、通園しなかった外国人児童は、基本的な生活習慣、集団生活、日本語力、コミュニケーション力に課題が見られた。日本の就学前施設に通うことにより、就学に向けて、望

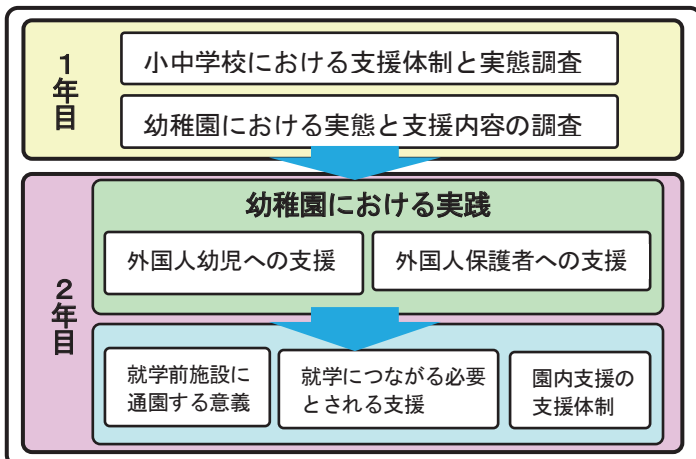


図1. 研究構想図

ましい資質・能力を身に付けていることが分かった。

Ⅲ 幼稚園における実態と支援内容（調査1・2）

1. 教師と外国人保護者対象の意識調査

(1) 在籍する外国人幼児数

B市立幼稚園は60園あり、全園児数は2,186人である。その中の35園に125人の外国人幼児が在籍し全園児に対する比率は5.7%であり、小中学校の比率より高い⁹⁾¹⁰⁾。園別在籍人数は表1の通りである。

表1. 園別在籍人数（令和2年度調査）

人数	1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人	8人	9人	10人	22人
園数	11	7	7	3	1	1	1	1	1	1	1

(2) 調査目的

B市立幼稚園における外国人幼児への支援内容は、教育指導員の配置、通訳の派遣などもあるが手続きが煩雑であり、小中学校のような支援体制が構築されておらず、各園に委ねられている部分が多い。外国人幼児と保護者の現状や意識、支援内容などの把握のために実態調査を行い、よりよい支援を導き出す。

(3) 調査対象と調査時期

202X年11月から12月に、B市立幼稚園の外国人幼児が在籍する35園の外国人幼児と関わった経験がある教師と外国人保護者を対象に実施した。

(4) 調査方法

調査用紙1（教師用）、調査用紙2（外国人保護者用）の質問紙を作成し、回答依頼をした。調査用紙2は、やさしい日本語、英語、ポルトガル語等7言語で作成し、回答できる言語を選べるようにした。

(5) 調査内容

① 調査用紙1（教師用）

- ・外国人幼児と保護者との関わりの中で困ったこと
- ・外国人幼児と保護者への支援内容 他

② 調査用紙2（外国人保護者用）

- ・入園時期、入園理由、入園してよかったこと
- ・幼稚園で困っていること、幼稚園への要望 他

(6) 倫理的配慮

調査目的及び回答・分析時の園や個人の匿名性の保証を明示した上で自由回答とし提出をもって承諾とした。

2. 教師対象調査の結果と考察（調査1）

(1) 回答者の属性

外国人幼児が在籍する26園82名の教師から回答を得た（配布数91枚、回収率90.1%、有効回答数82名）。回答者は園長・主任（学級担任以外）36.6%、学級担任・預かり担当63.4%である。

(2) 外国人幼児との関わりの中で困ったこと

「子どもが教師が話している内容を理解できない」「子どもが話している言葉が分からない」「発達の遅れが日本語力の影響か特徴か判断しにくい」が各7割

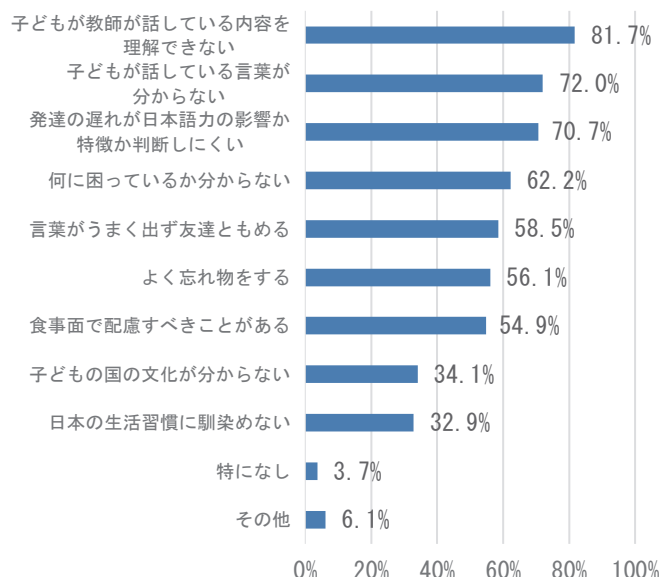


図2. 外国人幼児との関わりで困ったこと

以上と多く、言語（日本語）による意思疎通に困っている状況であることが分かる（図2）。外国人幼児は母語が確立していない状況で第2言語の日本語も習得しなければいけない困難さがある。

(3) 外国人幼児への支援内容

有効的支援は、「視覚的教材を利用する」93.6%、「個別に簡単な日本語で話す」87.5%、「友達との関わりの中で仲裁役になる」81.6%が高い。「日本語と母語のクラス表示」「イラスト入りの母語の本の活用」等の実践例もあった。

一方、効果がなかった支援とする回答は、全体的に低いもののどの回答にも見られた。例えば、「子どもが分かる言葉（母語等）で話す」は、有効的支援として48.7%あるが、反面、効果がなかったとする回答も11.5%あった。

(4) 外国人保護者との関わりの中で困ったこと

「日本語が分からなく伝えたいことを理解してもらえない」「提出物を出し忘れる」「保護者が伝えたいこ

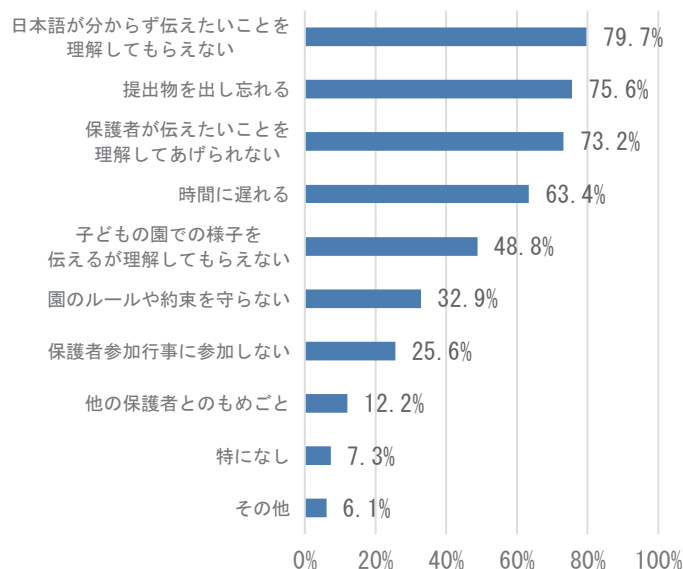


図3. 外国人幼児の保護者との関わりで困ったこと

とを理解してあげられない」が高く、提出物や時間に関しては、伝えられない、理解してもらえないもどかしさがあるようだ(図3)。

(5) 外国人保護者への支援内容

有効的支援は、「笑顔であいさつをする」95.1%、「重要なことを個別に伝える」93.6%、「話し掛ける機会をつくる」92.5%が高い。様々な方法で保護者と関わる機会をもち、好意的な教師の態度は安心感に繋がるのではないかと。

たよりについては、様々な工夫が見られ、「漢字にルビをふる」よりも「簡単な日本語にする」が最も実践され有効的であるが、保護者の日本語力に合ったものでないと有効的でないことが分かった。

通訳者と翻訳ツールは、活用した場合、有効性が高く、より正確に翻訳してくれる通訳者の必要性の方が高かった。一方で、これらを活用したことがない教師が50%以上おり、通訳依頼の煩雑さや翻訳ツールに園用がないことが原因であると考えられる。

同じ立場である周りの保護者の理解や支えが、今後、日本で生活していく外国人保護者にとっては、本当の意味での日本語や日本文化の習得、継続的繋がりとなること等の指摘も自由記述での回答で見られた。

(6) 必要と考える支援内容

自由記述より「必要と考える支援」をまとめると以下の通りである。

- ①区役所や保健師、教育委員会との連携(保護者支援有)
- ②多言語による入園ガイダンス
- ③通訳者の巡回派遣(たより翻訳、会話の通訳 等)
- ④翻訳ツールの整備(使用説明研修有)
- ⑤外国人幼児に関する研修、情報共有の場の設定
- ⑥園生活に必要な言語冊子(多言語で教師・保護者用)
- ⑦外国人幼児の取り出し支援(必要に応じて保護者も)
- ⑧多言語絵本の貸出

3. 外国人保護者対象調査の結果と考察(調査2)

(1) 回答者の属性

外国人幼児が在籍する22園83名の保護者から質問紙調査の回答を得ることができた(母親81.9%、父親18.1%)。

回答対象児は、3歳児16.2%、4歳児30.0%、5歳児53.8%で、71.1%が3歳児から入園している。

幼児の国籍は①日本22.9%、②ブラジル20.5%、③ベトナム14.5%、④フィリピン13.3%、⑤インドネシア9.6%、⑥ペルー7.2%であり、他にも中国、ネパール、バングラデシュ、タイと多国籍であることが分かる。母親と父親の国籍は、違いはあるが共に11カ国である。

出生地は71.1%が日本、家庭での使用言語は8割以上が日本語と母語の2言語以上である。

(2) 外国人保護者の意識

① 幼稚園に関すること

幼稚園を知った方法は「区役所・保健師」34.9%が最も高い。入園理由は「日本の生活習慣に慣れてほしい」67.5%、「日本語を覚えてほしい」66.3%、「日本文化を知ってほしい」60.2%、「家から近い」54.2%、「友達をつくってほしい」54.2%、「同じ小学校に行く子が多い」30.1%である。

入園してよかったことは、「日本語を覚えた」「友達ができ」「日本の生活習慣に慣れた」等の子どもの様子の他、「子育てのことを教えてくれる」に保護者として良さを感じていることが分かった(図4)。全回答者から、よかったことの回答があった。

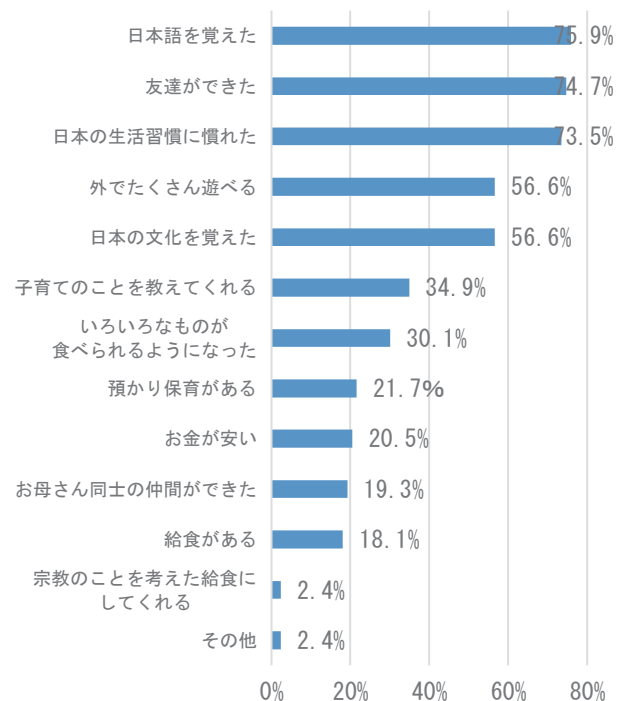


図4. 入園してよかったこと

困っていることは「特になし」47.0%が最も多いが、たよりの内容理解(24.1%)や、他の保護者との会話(16.9%)が困難とする回答もあった。

幼稚園への要望は、「子どもに日本語を覚えてほしい」41.0%が最も高く、次に「特になし」33.7%である。たよりに関しては、「分かりやすくしてほしい」27.7%である。通訳者の要望に関しては15.7%で低いが、日本語が分かる保護者や身内、知り合いに通訳してもらっている現状はあった。

他の外国人保護者に日本の幼稚園への入園を勧めるかについては、「はい」86.7%であった。

以上のことから、外国人保護者は、幼稚園の支援に満足している方が多いことが推測される。

② 就学に関すること

就学先は、「日本の小学校」92.8%であり、円滑な就学への意識から日本の幼稚園に入園していることが推測される。心配なことは「いじめられるか」61.1%、「勉強が分かるか」31.3%である(図5)。大谷¹¹⁾は「日本にいる外国につながる子どもたちのほとんど

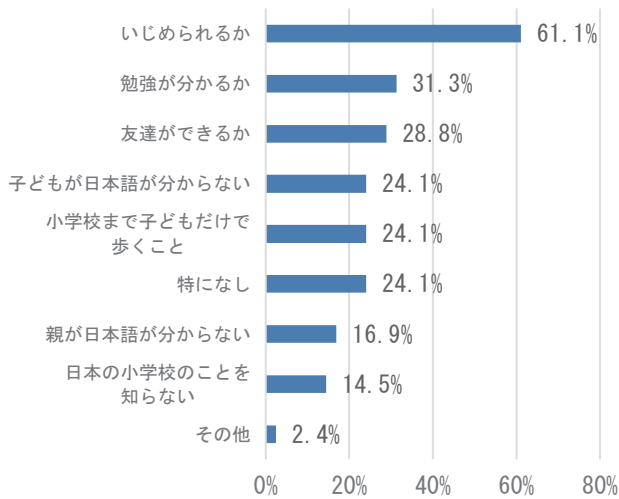


図5. 小学校で心配なこと

は、いじめられた体験をもっている」と述べている。いじめは日本人においても心配な問題であるが、外国人においてはより深刻な問題であると捉えられる。

4. 調査の考察

今回、教師と外国人保護者への質問紙調査を同時に実施したことにより、多くの外国人保護者は幼稚園の支援に満足を感じている一方で、困ったことに対する意識の違いがあることが分かった。

自由記述より教師は、「子どもは他の子と変わらず信頼関係を築き、愛情をもって接することが1番」「相手の立場で考え、寄り添えるようにしたい」と意識をもち、「言葉が通じないため、オーバーリアクションでよい行動を認めた」等、身振り手振りなどで努力しているが、「外国人保護者の不安な気持ちに気付くことができなかった」など言語(日本語)によるコミュニケーションに大きな問題を感じていることが明らかになった。これに対し外国人保護者は、就学後にいじめられることや子どもの日本語力を心配している。

以上の問題解決の手立てとして、以下の2点が必要であると考えます。

①言語(日本語)支援

通訳者の巡回派遣、翻訳ツールの整備が必要と考えます。なお、通訳者の保育への理解や継続性等、円滑なコミュニケーションのためのより良い支援の導入に向けて検討が必要である。

②多文化理解および園内外の支援体制の推進

外国人幼児と保護者の姿や、幼児の発達状況の背景に言語(日本語)面や経験、文化の違いが影響していることが考えられる。教師が理解を深めるためには、多文化や外国人幼児の発達等に関する園内外の研修が必要であろう。発達や養育面での課題については園での判断が難しいため、外部の専門機関との連携が必要である。B市教育委員会は、小・中学生を対象にNPOに業務委託をし、母国語支援、日本語・学習支援を実施している¹²⁾。長期的で円滑な支援を考えた場合、B

市立幼稚園においても協力体制を構築できるとよい。

IV 幼稚園における外国人幼児の実態と支援内容(調査3)

1. 研究目的

Ⅲの調査より外国人幼児への有効的支援として個別の日本語での関わりに関することが高く、個別支援の必要性が教師の自由記述にあった。外国人保護者も「子どもに日本語を教えてほしい」と要望していた。

学級での様子は、言葉でのやりとりや集団の中での話の理解などにおいて課題が見られやすい。外国人幼児の日本語力の育成のために、個別と集団における日本語支援が必要ではないかと考える。

そこで、幼稚園に在籍する年長児と学級担任を対象とし、外国人幼児の日本語力や支援の実態を把握することを目的として、語彙調査と面談を行う。

2. 研究の方法

(1)調査時期と調査対象

202X+1年6月から7月にC幼稚園の年長児24名と年長児クラス担任を対象に実施した。

(2)語彙調査

①使用教材と手順

外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントDLA(以下は「DLA」と記載)¹³⁾とプレスクール実施マニュアル¹⁴⁾を参考にし、日常生活の会話や学校園で使う言葉を選び、調査用カード(125問、表2)を作成した。子ども1人と質問者で行い、子どもに質問者がカードを提示したり質問したりし、子どもが回答した。

②評価方法

実施後、記録用の動画・音声で回答を確認し、DLAと

表2. 調査語彙(丸数字は質問数)

カテゴリー	語彙
自己紹介③	名前、年齢、組
体の部位⑩	目、口、鼻、手、眉毛、まつげ、耳、親指、爪、足、唇
食べ物⑩	ぶどう、りんご、苺、すいか、人参、御飯、きゅうり、卵、牛乳、海老
生き物・自然・天気⑳	犬、猫、ウサギ、象、蝶、魚、蛙、木、牛、鶏、馬、ネズミ、蟬、葉、枝、山、雨、雪、角、しっぽ、ひげ
園学校のもの⑤	時計、机、本、引き出し、黒板
所持品⑩	はさみ、靴、帽子、服、傘、めがね、鉛筆、消しゴム、筆箱、ランドセル
家に関するもの⑥	扇風機、携帯電話、ドア、屋根、階段、窓
乗り物・交通⑥	車、信号機、飛行機、船、自転車、バス
家族・職業⑤	おばあさん、女の子、運転手、医者、消防士
形容詞⑥	大きい、長い、高い、細い、軽い、寒い
動詞⑫	食べる、(手を)洗う、(絵を)かく、読む、掃除する、笑う、おなかが痛い、起きる、座る、泳いでいる、着る、歯を磨く
色⑥	赤、青、黄色、緑、黒、紫
形③	丸、三角、四角
数・数字⑧	数える：2・4・6・10、数字：3・5・7・10
文字④	自分の名前、名前から3文字
左右・順番③	右手、1番後ろ、真ん中
会話・復唱⑥	好きな食べ物、嫌いな食べ物、友達、遊び、朝の行動、4語文の復唱

プレスクール実施マニュアルの語彙力正誤表を基に正誤判断をした。判断が困難な場合は、質問者以外の1人以上と検討した。

(3) 担任への半構造化インタビュー

- ・ 集団における言語力の育成への意識や工夫
- ・ 外国人幼児の学級での様子

(4) 倫理的配慮

たよりにて保護者に語彙調査の実施目的及び回答・分析時の個人の匿名性の保証を説明し、実施を拒否する方は申し出てもらうようにし、承諾を得た。

3. 調査3の結果と考察

(1) 回答者の背景

年長児 24 名に実施し、日本語力以外の要因で回答が困難であった4名は除き、日本人幼児17名、外国人幼児3名(D・E・F、表3)で分析した。回答児の平均年齢は5歳9ヵ月で、1名平均13分36秒かかった。

表3. 外国人幼児の背景

	D	E	F
出生地	日本	日本	母親の国
来日時期			2歳6か月
家庭内言語	母語	日本語 (両親間は母語)	日本語 (母語(母親から))
入園時期	3歳児1学期		
就学先	日本の小学校		
保護者の日本語力	日本語での会話や文章理解ができる		

学級担任は経験年数6年目で、年中から対象学級の担任をしている。

(2) 語彙検査

①学級全体の結果

回答者の全員が80%以上の正答率であり、日本人幼児と外国人幼児では大きな差はなかった。最高正答率は97.6%であった。正答率が50%以下の質問は、「まつげ」「枝」等の下位語や、学校に関するものでは「黒板」「筆箱」等、職業では「医者」「消防士」であった。

②外国人幼児の結果

Dは、下位語や学校に関するものと職業に無回答が多く(表4)、発音誤りの語彙があった。友達に関する質問は、「友達」の概念が分からなかった。

Eは、幼児語での回答があり、学校に関するものと職業、復唱に誤答が多い(表4)。また、特徴的な表現や抑揚の弱さが気になった。

Fは、正答率が高かったが、幼児音やイントネーションの誤りがあった。形の正答率が低い(表4)が、三角と四角の覚え誤りの可能性が考えられる。

(3) 担任への半構造化インタビュー

①集団における日本語力の育成への意識や工夫

言葉で答える遊び、絵本の読み聞かせ、文字表記の導入の他、文章で具体的に適切な表現ができるよう、

表4. 語彙調査結果正答率(丸数字は質問数、単位は%)

カテゴリー	日本人	D	E	F
自己紹介③	100	100	100	100
体の部位⑪	83.4	72.7	63.3	81.8
食べ物⑩	99.4	100	90.0	100
生き物・自然・天気⑫	92.7	90.5	95.2	95.2
園学校のもの⑤	75.3	60.0	80.0	80.0
所持品⑩	89.4	70.0	90.0	100
家に関するもの⑥	91.2	50.0	100	100
乗り物・交通⑥	95.1	100	83.3	100
家族・職業⑤	74.1	40.0	40.0	80.0
形容詞⑥	75.5	83.3	83.3	100
動詞⑫	90.2	100	91.7	100
色⑥	99.0	100	100	100
形③	98.0	100	100	33.3
数・数字⑧	99.3	87.5	100	100
文字④	89.7	75.0	100	100
左右・順番③	94.1	66.7	100	100
会話・復唱⑥	91.2	66.7	66.7	100
合計	90.6	82.4	87.2	94.4

声掛けをしている。外国人幼児に対しては、ゆっくり、簡単な言葉で具体的に話をするようにしている。

②外国人幼児の学級での様子

3名とも友達や教師と言葉でのやりとりができる。

Dは、年中時より長文で話すようになった。友達との関わりは少ない。絵本は好きで、集団の中で話を聞き理解して行動できる。

Eは、日本語の言い誤りを自分で訂正するようになったが、会話では抑揚の弱さがある。集団の中での話や絵本の時、見聞きしようとする意識が見られにくい。

Fは、会話の量が増え、自分から挨拶ができる。人柄がよく、友達から遊びに誘われることが多い。絵本は好きで、集団の中で話を聞き、理解して行動できる。

4. 研究の考察

結果から、外国人幼児は園生活を過ごすために必要な日本語力が身に付いていることが分かった。年少時から入園し、適切な援助や環境の中で生活し、保護者の日本語への理解が影響していることが推測される。

小学校以降の学習では、情報を入手・処理し、それを分析・考察した結果を伝えるような思考を支える言語力である学習言語能力¹⁵⁾が必要である。幼稚園においては、生活言語能力と思考を支える語彙力や想像力の基礎の育成が求められる(図5)。集団の中では、個々の日本語力の実態把握や支援には限界がある。特に家庭でネイティブの日本語に触れる機会の少ない幼児は、就学に向け、個別支援があると望ましいと考える。

①個別での支援

Dは、絵本の読み聞かせやクイズ、しりとりなどを通して、様々な日本語に触れたり、イメージを膨らませながら考えたり話したりする機会をつくる。その中で、発音誤りをしている語彙を把握する。

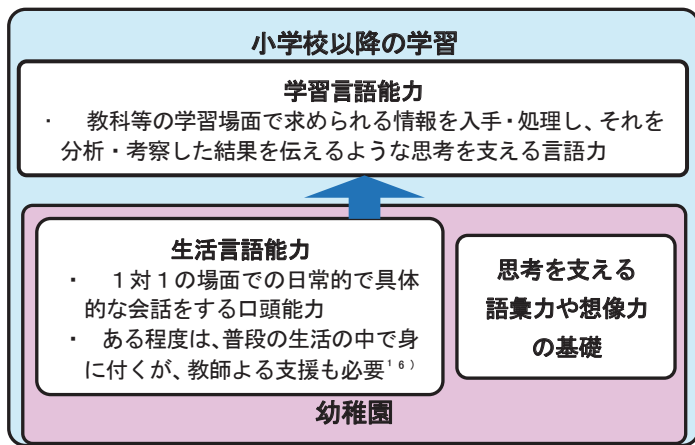


図5. 言語能力の獲得過程

Eは、好きな絵本の読み聞かせ、会話、まねっこ遊び、しりとりなどを取り入れ、聞く力を育み、正確な表現や抑揚につながるようにする。また、文章作りができるよう間違い探しを取り入れてみる。

Fは、形遊びの中で、様々な形に触れながら、思考力や想像力を働かせられるようにする。発音に関しては、歌(子音を意識)が効果的ではないかと考える。

②集団での支援

担任の意識や工夫の継続は、日本語力育成において重要であると考え。言語環境である教師は、子どもの心に届く応答性ある言葉での関わりが重要である。

思考を巡らしたり考えを言葉で伝えたりすることができる遊び(学校ごっこやお店屋ごっこ等)、語彙を増やし思考を支える言語力を身に付けるための様々な言葉遊び(しりとり、絵カードかるたなど)、歌(子音を意識)を取り入れていく。また、行事や季節はその時にしか出会えない語彙がある貴重な学びの場であり、意識していきたい。外国人幼児のための活動が、ユニバーサルデザインのように学級全員の日本語力向上につながるのではないかと。

V 幼稚園における外国人幼児への日本語支援の実践

1. 研究の目的

IVの結果から、Vでは外国人幼児に対し、幼稚園で就学につながる日本語力を育成するための個別(少人数)支援を実施し、よりよい方法や内容を検討する。

2. 研究の方法

(1)実施時期と対象

202X+1年10月から12月にC幼稚園の外国人幼児3名(D、E、F)を対象に実施した。

(2)支援方法

IVの日本語力の結果を基に、個別の指導計画を作成し、対象児の実態に応じた支援方法や内容、教材を検討する。主に昼食後の自由遊びの時間、Dについては、通常保育後の預かり保育の時間に別室にて、C幼稚園職員(フリー主任)が実施する。

実施後、記録用音声を基に会話の内容や発音、文章の構成などを確認し、教材の適切性について検討する。

(3)支援内容

生活言語能力の把握(語彙力や発音、抑揚など)、小学校以降の学習につながる語彙力や想像力の基礎の育成を主なねらいとし、幼児期に適した遊びを通じた支援内容を取り入れる。

①会話

経験や考え、気付き等を言葉で表現できるよう身近な出来事や行事等をトピックにする。話しながら日本語力を把握し、適切な日本語表現の伝え直し等をする。

②カード遊び

しりとりや言葉の仲間あつめ、クイズ、お話づくりなどの中で、絵や文字カードを使用し、語彙力、認知、文字への興味、音韻、文章をつくる力などを育むことができるよう、様々な語彙に触れる機会とする。

③すごろく

語彙調査の結果を基に、習得困難な語彙をマスに記載し、様々な語彙や文字、数に親しむことができるようにする。また、想像力を育むことができるよう、止まったらクイズに回答するマスを設定する。

④復唱

文の構成や抑揚のある話し方などが身に付くよう、「まねっこ遊び」と称し、生活や遊びで活用可能な文章を復唱する。3語文から徐々に語数を増やしていく。

⑤制作(折り紙)

折る過程での形の変化を様々なものに見立て、想像することを楽しむ。また、様々な色を取り入れ、色への認識を確認する。完成後、遊べるものにする。

⑥形遊び

想像力を働かせながら遊べるよう、丸、三角、四角の形からの連想描画やタングラムを取り入れる。

⑦間違い探し

左右の絵の違いを見つけ、具体的に文章で表現する。

⑧歌

発音間違いを引き起こす子音に注目し、その文字を多く含む歌を選び、口をはっきり動かしゆっくり歌う。

⑨絵本の読み聞かせ

季節に適したものや興味をもてそうなものを用意する。集中して聞くこと、考えること、想像すること、予測することを経験でき、また、読みことばに触れることもできる¹⁷⁾効果的な時間にする。

(4)倫理的配慮

書面と口頭にて、対象児3名の保護者に個別支援の実施目的及び内容、個人の匿名性の保証を説明した。承諾の場合は用紙に署名をし、提出していただいた。

3. 研究結果と考察

(1)外国人幼児Dへの支援(個別6回・少人数2回)

会話では、園での出来事を話題にすると思いや気持

ちを言葉で表現できたが、発することに時間を要したり、話し方がぎこちなかったり、経験しても出ない語彙があったりした。1・2 語文が多いが接続詞を使い、6・7 語文の時があった。少人数支援では発言回数が少なかった。

カード遊びでは、上位語から下位語を選択、絵と文字合わせは分かるものが多数であった。また文字カードを並べると「つが一緒」と同じ文字を見つけていた。すごろくやすもうゲーム（折り紙で作成）では、「負けるのやだ」と言い、参加を拒否した。折り紙で作ることは、形の変化を言語化しながらできた。読み聞かせでは、お気に入り絵本があり、気付きをつぶやいたり、ストーリーに合わせて動いたりしていた。

(2) 外国人幼児Eへの支援（個別4回・少人数4回）

会話では、経験や思いなどを言葉で表現できた。1・2 語文が多く、長文だと理解しにくい文章になった。また、抑揚の弱さや話し方のぎこちなさが気になった。

カード遊びでは、絵と文字合わせやしりとりの時、進んで文字を読んだり、友達に教えたりしていた。

復唱は、真剣に聞く姿が見られた。5 語文以上になると助詞や語彙の順番などに間違いがあった。抑揚の弱さや話し方のぎこちなさは感じなかった。

間違い探しでは、「ありがとうございます」「1つあります」と言葉で表現していた。読み聞かせでは、文字を読んだり、気付きをつぶやいたり、笑ったりしていた。

(3) 外国人幼児Fへの支援（個別1回、少人数4回）

会話では、生活発表会の劇のセリフを言う時の気持ちや当日に緊張したことについて具体的に話せた。

すごろくでは、発言多数（2・3 語文が多い、11 語文・接続詞あり）だったが、「ノート→ノト」「引き出し→ひひ引き出し」と読み方がぎこちなかった。

形遊びでは、三角と四角の名称が混乱していた。四角からホテルをかいたり、タングラムで初心者マークや新幹線等を作ったりし、言葉でも表現できた。

歌（「ぞうさん」「サンタッタ」）の中では、気になっていた「ぞ」「さ行」を発音できていた。

(4) 実践後の語彙力調査結果

個別支援実践後（1、2月）の2回目の語彙調査では、対象児3名とも回答率が90%以上に上がった（表5）。「引き出し」「黒板」は、2回とも2人ずつ誤答であり、身近にあるものだが、触れる機会が少ない語彙であることが推測される。1回目は正答、2回目は誤答の語彙があったが、気になる発音や表現等は減少した。

表5. 1・2回目の語彙調査正答率の比較（単位は%）

	D	E	F
1回目	82.4	87.2	94.4
2回目	92.8	96.8	97.6

4. 研究の考察

個別や少人数での支援の中で、発音や文章の構成な

どの日本語力をより詳しく把握することができた。また、個別支援後に実施した2回目の語彙調査の結果から日本語力が向上していることが分かった。個別支援だけでなく、言語力が育まれる適切な援助や環境の中での生活などの影響も考えられる。

対象児が楽しむ姿や参加への意欲は見られたが、教材の適切性については抜粋すると次の通りである。

カード遊びは、2種類の遊び（絵・文字合わせとしりとり）を取り入れると、覚えた語彙に触れる機会が増え、より楽しめた。名称を答える、聞いた名称の絵カードを選ぶ等、日本語力に応じて、遊び方を工夫するとよかった。復唱は、正解する喜びを得られるよう、5 語文までが適当であった。絵本の読み聞かせは、日本語力や興味に合った絵本の時は、集中して観ていた。分かる嬉しさが、日本語習得への意欲、日本語力の向上につながるため、日本語力や興味などを踏まえた内容を考慮する必要がある。

対象児3名の実態から、個々に課題はあるが、小学校での学習に参加できる一定程度の日本語力が備わっていると考えられる。就学後、学年が進むにつれて難しくなる学習言語が理解できず、学年相当の学力をつけることができなくなる外国人児童がいる¹⁸⁾。円滑な接続や学年相当の学力をつけることができるよう、小学校と外国人幼児の日本語力について共有できるシステムがあるとよいと考える。

また、幼稚園において文字の読み書き支援をどの程度、取り入れるべきかが課題である。

VI 幼稚園における外国人保護者への支援の実践

1. 研究目的

Ⅲの調査より、教師は外国人保護者との関わりにおいて、言語（日本語）でのコミュニケーションに大きな問題を感じていることが明らかになった。そこで、Ⅵでは、外国人保護者との円滑なコミュニケーションや園や子どもへの理解につなげるために必要と考える支援を実践し、よりよい方法や内容を探る。

2. 研究方法

(1) 実施時期と対象

202X+1年4月から10ヵ月間、C幼稚園の外国人幼児10名の保護者を対象に実施した。

(2) 支援方法

①外国にルーツをもつ幼児調査表の作成

「外国人幼児等の受入れにおける配慮について」¹⁹⁾を参考にし、外国人幼児と保護者の状況を知るために入園前に確認するとよい項目（正式名、通称名、国籍、出生地、家庭内言語、入園理由、要望など）を日本語と英語で作成する。今後、多言語での回答を可能にするため、保護者に翻訳を依頼する。

②外国人保護者の日本語力に応じたおたよりの作成

たよりを分かりやすくするために、やさしい日本語、やさしい日本語・ルビありなど、各外国人保護者の日本語力に合ったものを作成する。

③理解につながるコミュニケーション方法の工夫

園や子どものことなど理解につながる円滑なコミュニケーション方法（話し方や伝え方の工夫、通訳の依頼、翻訳ツールの活用）を探り、実践する。

3. 研究結果と考察

(1)外国にルーツをもつ幼児調査表の作成

①回答者の背景

外国人幼児の保護者は、外国籍 84.2%、日本国籍 15.8%である。家庭での使用言語は、日本語 10.0%、日本語+母語 80.0%（使用割合は個々に異なる）、母語 10.0%である。日本語という回答もあるが、両親間が日本語以外の言語を使用しているため、全員が家庭では2言語以上の環境である。

②園生活に関すること

入園理由は、「日本の生活習慣に慣れてほしい」90.0%、「日本語を覚えてほしい」「日本文化を知ってほしい」80.0%、「家に近い」「友達をつくってほしい」70.0%が高く、Ⅲの調査と同様であった。

幼稚園への要望は「子どもに日本語を教えてほしい」が最も高く、Ⅲの調査と同様だが割合は高い(図6)。

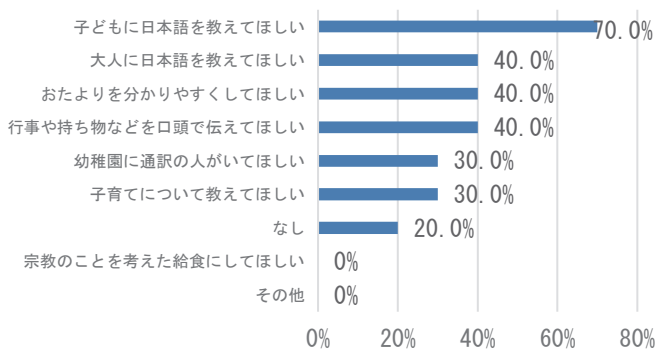


図6. 幼稚園への要望

心配なことは、「親が日本語が分からない」「友達ができるか」「給食を食べることができるか」40.0%で、全体的に低かった(図7)。入園後の実施のため、入園前の場合、異なる結果が見られると推測する。

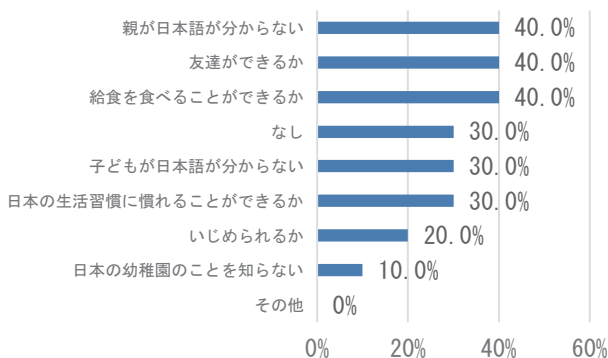


図7. 心配なこと

気を付けてほしいことは30.0%から回答があり、食べ物に関しては食物アレルギーと宗教上、行事に関しては宗教上、配慮してほしいことがあった。その他には、発達の特性に関するものであった。

③就学や将来に関すること

就学先については、「日本の小学校」90.0%、「まだ分からない」10.0%であった。中学校入学時に帰国する予定である外国人幼児がいることが分かった。

将来については「日本」50.0%、「どこでも」30.0%、「親の国」10.0%、「まだ分からない」10.0%であった。

外国人幼児は日本での生活で、就学先や将来のことを考慮し、外国人保護者に母語習得の大切さについても伝えるべきだろう。

④おたよりの理解に関すること

おたよりを読む時、翻訳ツールを使う外国人保護者は70.0%で、殆どがGoogle翻訳を利用している。

おたよりの分かる文字表記は、「英語」30.0%、「ルビなし」20.0%、「やさしい日本語(ルビなし)」20.0%、「やさしい日本語(ルビあり)」20.0%、「やさしい日本語(ひらがな)」10.0%、「やさしい日本語(ローマ字)」0%であった。

(2)外国人保護者の日本語力に応じたおたよりの作成

上記④の結果より、おたよりの表記希望は、「英語」が1番多く、「やさしい日本語」が分かりやすいことが分かった。継続可能な作成方法を考慮し、「ルビなし」「やさしい日本語(ルビなし)」「やさしい日本語(ルビあり)」を作成し、各保護者の日本語力に合ったものを配布した。

翻訳ツールを使う外国人保護者が多数であり、誤訳を避けるために、「短い文章で表現する」「特別な名詞は言い換える」などの工夫²⁰⁾を取り入れた。やさしい日本語での作成は、短文で適切な表現を見つけ出すことの困難さがあった。どの程度、分かりやすさにつながったかは確認することはできなかった。

(3)理解につながるコミュニケーション方法の工夫

①話し方や伝え方

会話時に以下のことを意識するようにした。

- ・やさしい日本語で話す。
- ・短文でゆっくりはっきりと発音する。
- ・日程変更や特別な持ち物がある時は個別に伝える。
- ・絵や写真、実物などを見せる(視覚理解)。
- ・必要なことを記入したメモを渡す。
- ・表情の変化を読み取る。
- ・英語が理解できる保護者には英語で伝える。

外国人保護者との関わりから日本語力や性格等を把握し、個々に合った関わり方に繋げることができた。教師の意識や姿勢は、外国人保護者の幼稚園への理解や安心感、信頼、また日本の生活習慣や文化への理解や習得などにつながるため、重要である。

翻訳ツールの活用や再度の確認、日本語習得という

理由で、連絡帳の活用を学級担任に要望する外国人保護者もいた。連絡帳は、活用の仕方により有効的なコミュニケーションツールとなる。

②通訳の依頼

個人面談時、通訳の依頼をした。保護者の分かる言語で会話ができ、園や子ども、家庭のこと、子育ての悩みなどについて話せた。通訳依頼の手続きの煩雑さや、通訳者への専門用語の伝え方が課題である。

③翻訳ツールの活用

ポケトークを活用し、(2)で述べた工夫を取り入れて音声支援を実施した。言語変換をすることにより互いに会話できるが、2台用意すると会話がスムーズにできる。また、誤訳を避けるため、逆翻訳での確認は必要であるが、誤訳されていた場合の日本語表現の転換の難しさはあった。様々な機能が内蔵されているが活用しきれなかったため、有効活用のための操作方法の熟知が必要である。機器のため、正確な翻訳を求めることは難しいが、活用することにより会話が可能になるため、機能の進歩に期待する。

4. 研究の考察

園生活において、外国人幼児だけでなく外国人保護者の日本語力や文化的背景などを把握することは重要である。両親の考えは、外国人幼児の言語獲得に影響を及ぼす要因の1つとして考えられるため²¹⁾、入園前に理解しておく必要はある。C幼稚園の外国人保護者は多国籍で文化的背景は異なるが、園への理解があり、子育てに熱心さが見られ、それが子どもの姿に表れていた。また、外国人保護者の両方もしくはどちらかが、ある程度の日本語力があるため、園や子どもに関する概略は理解できていたのではないかと。日本人保護者と同様に日々の子どもの姿を伝えたい気持ちはあるが、日本語理解が困難である外国人保護者に対しては、伝えることにためらう時がある。翻訳ツールを活用し、積極的にコミュニケーションを取ることを心掛けたい。外国人保護者が教育施設と良好な関係を築けるようにすることも、幼稚園の役割の1つであると考えられる。

市からの入園や副食費免除などに関する手続きの書類は、日本語が理解できるという前提で作成されている。また、保護者への周知や共通理解のためにはおたよりは必要ではあるが、1年間で配布する量は多い。やさしい日本語のおたよりの作成は、多忙な教師には負担となる。日本人保護者にとってもやさしい日本語での表記は理解しやすいため、書類やおたよりの作成方法の見直しが必要だと考える。

園の支援は、在籍期間のみであり、継続的な支援を考えると、周りの保護者との連携が、就学後にも繋がる効果的な関係である。保護者同士が接する機会をつくり、よい信頼関係を築けるよう支援できるとよい。

VII 総合考察

1. 外国人幼児が就学前施設に通園することの意義

日本生まれ日本育ちで、将来、日本で生活する外国人が増加している現在において、日本の学校での教育は、日本社会で生きる力を身に付けるために必要である。たとえ帰国するとしても、予測が困難な時代において、学校教育は必要である。日本では外国人への就学義務がないため、保護者の判断に委ねられるが、殆どが日本の学校に就学している。

国立教育政策研究所国際協力部の「外国人児童生徒の教育などに関する国際比較研究報告書」²²⁾では、就学前段階での支援の重要性を3点から説明している。

①義務教育への就学準備（就学レディネス）

- ・ 日本語や日本の学校文化に慣れ、就学のハードルを低くし、不適応等の問題回避にもつながる。
- ・ 外国人保護者が日本の教育制度や学校を理解する機会となり、就学後の家庭支援が得られやすい。

②学力の基盤形成

- ・ 幼児期の言語能力には、家庭環境や働きかけが重要である。語彙力を増やしたり、家庭での働きかけを促したりする支援が必要である。

③社会における格差是正対策

- ・ 低所得者家庭の子どもに対する幼児教育・保育は、投資効果が高い(実験型プログラムで立証)。
- また、外国人幼児の通園は、日本人幼児にとっても意義がある。異なる習慣や行動様式をもった他の幼児と関わり、それを認め合う貴重な経験となり²³⁾、多様性を尊重する心の育成につながると考える。

2. 就学につながる必要とされる支援

幼稚園における就学につながる必要とされる支援を研究結果からまとめると以下の通りである(図7)。

(1)外国人幼児への支援

- ・ 文化的背景を考慮した個に応じた関わり
- ・ 日本語力の把握と遊びを通じた日本語力の育成
- ・ 小学校への日本語力を含む情報提供

(2)外国人保護者への支援

- ・ 保護者の日本語力に応じた友好的な関わり
- ・ 日本文化や教育、母語の重要性等に関する情報提供
- ・ 保護者同士の交流の機会の設定

3 必要とされる園内の支援体制

(1)外国人幼児と保護者への理解

上記2を実施するためには、教師が子ども一人一人を理解し、子どもが安心して園生活を過ごせる状況が不可欠である。同化の強要ではなく、文化的背景や宗教などを理解し、自分のルーツに誇りをもち、過ごしやすい方法を共に考えていくことが求められる。

また、就学後の学習のためにも外国人保護者に家庭での日本語使用を要望する教師の話聞くが、外国人

幼児と保護者にとって、母語はアイデンティティの1つであり、家庭内会話の保証、ダブルリミテッドの回避のためにも必要である。母語習得は第2言語である日本語習得にも繋がるため、教師や外国人保護者もその重要性を理解していく必要があるだろう。

小中学校では日本語理解が不十分なため、障害があると診断され特別支援学級の在籍になることがある。2019年9月の毎日新聞「外国人が多く住む25市町」を対象とした調査では、外国籍の子どもの特別支援学級在籍率は日本人の子どもの2倍超に達している²⁴⁾。幼児期は心身の発達が著しく、個人差も大きいため、発達障害の診断は早期であればあるほど難しい。外国人幼児の場合は、言語や文化の違い、異文化環境への適応過程等の要因も加わり、さらに難しい。そのため、過剰な発達診断が下されたり発達障害が見落とされたりする危険性がある²⁵⁾。実際にⅢの調査の外国人幼児との関わりで困ったことの項目「発達の遅れが日本語力の影響か特徴か判断しにくい」70.7%の結果からも、理解の難しさが分かる。外国人幼児の泣く、怒る、保育室から出ていく等の気になる行動の要因を、日本語力や文化的背景などを含めアセスメントし、寄り添いながら支援することは、外国人幼児への安心感や園生活への適応力にも繋がるだろう。

(2) 園内の支援体制

外国人幼児と保護者への支援実践を園内支援体制としてまとめると以下の通りである。これらを今後の課題として実践し、引き続き改善を図っていきたい。

- ・ 入園前に保護者に調査票の記入を依頼し、教師間で外国人幼児と保護者について共有する。
- ・ 外国人幼児と関わる中で、日本語力を把握したり文化的背景等を考慮し行動理解をしたりする。
- ・ 保護者に対しては、意識的に関わる機会を設け、園への理解や信頼関係を得られるようにする。
- ・ 打ち合わせ時に姿を共有し、気になる行動については、アセスメントし支援につなげる。
- ・ 必要に応じて、個別の指導計画の作成、個別での日本語支援、通訳の依頼、外部関係機関（区役所や国際交流協会、地域のNPOなど）との連携を行う。

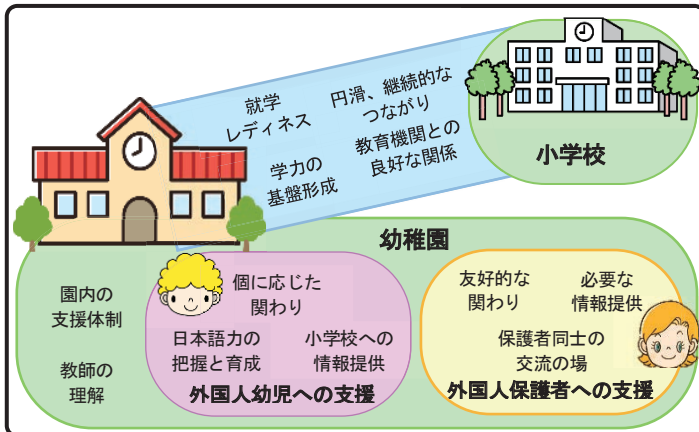


図7. 幼稚園における就学につながる必要とされる支援

引用文献

- 1) 浜松市教育委員会 (2020) 「外国人子供教育推進事業」説明資料 1
- 2) 大谷千晴 (2017) 「外国人子ども白書—権利・貧困・教育・文化・国籍と共生の視点から」明石書店 114
- 3) 文部科学省 (2020) 「外国人幼児等の受入れにおける配慮について」 5-6、9-10
- 4) 文部科学省 (2020) 「外国人の子供の就学促進及び就学状況の把握等に関する指針」
- 5) 前掲 (1) 1-2
- 6) 前掲 (1) 6
- 7) 前掲 (1) 10-11
- 8) 浜松市教育委員会 (2019) 「浜松市における外国人児童生徒等の状況と指導体制について」
- 9) 浜松市 「令和2年度浜松市立幼稚園園児数」 (令和2年5月1日現在)
<https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/somu/yougakkou/documents/r2y.pdf>
(令和3年2月16日最終確認)
- 10) 浜松市 「令和2年度外国にルーツをもつ園児数調査」 (令和2年1月現在)
- 11) 前掲 (2) 209
- 12) 前掲 (1) 10-11
- 13) 文部科学省初等中等教育局国際教育課 (2014) 「外国人児童生徒のためのJ S L対話型アセスメントDLA」 15-22、149-155
- 14) 愛知県地域振興部国際課多文化共生推進室 (2009) 「プレスクール実施マニュアル」 84-108、129-132
- 15) 文部科学省 (2019) 「外国人児童生徒受入れの手引き 改訂版」 明石書房 7
- 16) 前掲 (13) 7
- 17) 中島和子 (2016) 「完全改訂版バイリンガル教育の方法 12歳までに親と教師ができること」アルク 27-28
- 18) 前掲 (2) 111
- 19) 前掲 (3) 7-8
- 20) 咲間まり子 (2020) 「保育者のための外国人保護者支援の本」 かもがわ出版 77
- 21) 上野直子 (2003) 「在日外国人幼児のコミュニケーション支援：家族への援助の視点から」コミュニケーション障害学 20 34-36
- 22) 国立教育制作研究所国際研究協力部 (2015) 「外国人児童生徒の教育等に関する国際比較研究報告書」 78-79
- 23) 前掲 (3) 17
- 24) 金春喜 (2020) 「「発達障害」とされる外国人の子どもたち フィリピンから来日したきょうだいをめぐる、10人の大人たちの語り」明石書店 13-30
- 25) 名倉一美・二井紀美子 (2018) 「外国にルーツをもつ発達の気になる幼児の就園状況と支援体制の実態調査—愛知県東部・静岡県西部を対象に一」乳幼児教育学研究第27号、23-33